

2020年5月1日

## トルストイ「戦争と平和」読後感

山口光恒

3月末からの新型コロナウイルス (Covid 19) による在宅勤務を利用して数十年ぶりに「戦争と平和」を読んだ。これで3回目だが以前は大型の世界文学全集で読んだのだが、何度かの引っ越しで本が失われ、子供が家に残した岩波文庫版 (米川正夫訳) で読んだ。小型で且つ文字が極端に小さく、全部で2500頁ほどの本で、加えて登場人物の名前も覚えていないので、読み進める都度冒頭にある文中の人物についての解説を参照するという具合で、特にはじめは読むスピードが極端に遅く感じた。家では他に仕事と音楽にも大分時間を割いたので読書は原則として1日3時間程度と決め、結局4週間かけて読了した。今後これだけの長編を読むかどうかは全く自信が無いが、仕事を辞めれば事情は変わるかも知れない。

読んでみて若い頃読んだにも拘わらず内容を相当程度忘れていることに気がかされた。きちんと読んでいなかった証拠かも知れない。主役の一人である Andrei 公爵がアウステルリッツの会戦で負傷して倒れ Napoleon の捕虜になる場面で、一面に広がる青空を見て自然の雄大さと Napoleon に対する敬意を失うあたりは良く覚えているが、Pierre の捕虜期間中の経験や最後の方で彼が Natasha と結ばれ、Rostov が Maria と結婚するところは全く忘れていた。読んで感じたことは概略次の通りである。

### 1、トルストイの思想

間違いなくこの小説は一大スペクタクルである。とはいっても Thomas Mann のブッデンブローク家の人々のように何世代にも亘る物語ではない。たかだか Napoleon が皇帝になった後から 1812 年のロシア遠征敗北による失脚迄の短い期間を対象としている。とはいえ登場人物は数百人は居り当時のロシアや戦争の状況を知るといっても興味深い本である。自宅のすぐ近くに徳富蘇峰の旧居があり、かれはロシアでトルストイに面談している。今はコロナの影響で休館中だが再開したら行ってみようと思う。何か彼なりの見方がある資料が展示されているかも知れない。

物語は Andrei、Pierre、Nicholai (Rostov)、Alexandre 皇帝、Napoleon などの男性陣と Natasha、Ellen、Maria 等の女性を中心に恋あり戦争あり、陰謀ありでこうした場面は息つく暇も無いほどで実に面白い。しかしそうした出来事に引っかけてかなり頻繁にトルストイの思想が前面に出てくる。その集大成

が最後の 170 頁ほどのエピローグのうちの後半で、ここでは小説の進展は全くなく、「これでもか」という具合に彼の説を聞かされる（読まされる）。これを一言で言うと歴史は英雄によって作られたものではなくその時代時代の社会全体の要素によって必然的に作られたというものである。小説中の登場人物の中ではロシア軍総司令官のクトーゾフがこの思想を代弁した人物として描かれている。それはともかくこれを何度も読まされている内に **Karl Marx** の「下部構造が上部構造を規定する」というテーゼを思い出した。**Marx** を読んだ我々にはこれはごく穏当な考えであり知見だと思うが、おそらく **Tolstoy** がこの小説を書いた頃にはフランスとロシアの戦争は **Napoleon** と **Alexandre** の関係から起こり、戦争の帰結もこの二人の考え方や用兵術によると言うような考え方（これほど単純ではないが）が一般的だったのかも知れないと思った。「戦争と平和」の執筆が 1865～1869 年で翌年に **Marx** の資本論が出版されているのも何かのヒントではないかと思う。**Tolstoy** がこの小説で言いたかった事はこのことではないかと言う気がしている。折角小説として面白いのに何度もこうした思想が展開されるといささか辟易とせざるを得ない。

## 2、貴族の実態

基本的にこの小説の主要人物は全て貴族である。更に言えば公爵、侯爵、伯爵だけと言って良い。この点ドフトエフスキーとは全く異なる。日本の貴族の実態については小生身近にそういう人がいないので分からないが、農奴制が機能していたロシアでは貴族は日本のそれよりも遙かに豊かだったのではないかと想像される。夜会など小説の色々な場面の描写から当時の貴族がどんな暮らしをしていたのかが窺い知れ、この点は面白かった。特に興味深かったのはフランス語のことで、**Napoleon** との戦争中でも彼らは基本的にフランス語を話していたこと、また、中にはフランス語は堪能でもロシア語をあまり良く解さない貴族もいたらしいことである。最終的にモスクワ陥落間近になって初めて夜会の席で自主的にフランス語を禁止し、それでも微妙な表現はフランス語でしか出来ないのので敢えて罰金を払ってフランス語を使うと言う場面まである。また、軍隊でも無頼漢のロシア将校がフランス軍の陣地に入り込んで軍の配置を聞き出す場面があるが、当然これはフランス語でやっているわけで、相手から不信感をもたれない程度のフランス語が出来たと言うことではないかと思う。また、アウステルリッツの会戦（1805 年）とボロジノの戦い（1812 年）の間に一時的にフランス・ロシアの間に和解が成立するが、そのときの場面の描写として **Napoleon** と **Alexandre** の会見がある。ここでは当然のこととして二人はフランス語を話している。余談だが、この小説の中に頻繁にフランス語の会話が出てくるので翻訳者は大変だったことと思った。

### 3、戦争の実態

もう一つ興味があったのは戦争の実態でロシア軍のみではなくフランス軍も色々な民族が混じっていることで、しかも軍のトップにも外国人がいることである。ロシア軍のトップにはドイツ人が居て皇帝に非常に近い立場である。フランス軍の中にもイタリア人など多くの外国人がいた(ナポリなどは Napoleon に征服されたのでこういうところからの将校と兵士が多数いたのではないかと思う)。また、1812年の戦争中でもモスクワでフランスのバレリーナが活躍し、ロシア貴族の家には家庭教師としてフランス人が多数働いている。そして小説中の人物の話の中でロシア人自らフランスに対して後進国であることを語らせている。当時の特に世界の upper class でのフランス語の威力を彷彿とさせる。

もう 1 点、当たり前かも知れないが、戦争は軍人がするものだということである。モスクワが占領され、貴族をはじめとする upper class はモスクワ以外の領地に逃げ出すが、宮廷のあるペテルスブルグは言うに及ばず、その他の地域でも相変わらず貴族社会の社交が行われている。勿論ロシアでは少なくとも貴族については徴兵制ではないので、戦争に行きたくない貴族は相変わらず従前の生活様式を保っているわけである。小説の後半にはフランス兵の捕虜も登場するが、このうち上流の身分の捕虜はパーティに招待され、大手を振ってフランス語で話している。

### 4、Tolstoy の博識

驚かされるのは Tolstoy の博識である。欧州諸国の歴史、科学(物理学、天文学、化学、数学)、芸術等多方面で Tolstoy の博識が表明されるが、特にエピローグ第 2 編 70 頁分を読むとほとほと感心せざるを得ない。当時のロシアのインテリが世界の動きをここまで知っているのかと驚くこと再三である。プトレマイオス(天動説)とコペルニクス(地動説)まで登場するのには恐れ入った。これまでの勉強不足を恥じるどころ大である。

以上色々感じるころはあったが、それらを総合してみてもやはりこの小説は面白い。コロナのお陰だ。トルストイは貴族で相当の財産家であったにも拘わらず農奴解放など近代的な思想を持ち、それを実践しようとして国からにらまれるだけでなく、家族との離反も経験した。とはいえ、彼の小説に貴族ではなくシベリア流刑を経験したドフトエフスキーの小説から受ける人間の性やゾラの「居酒屋」から得られる大衆の力強さを期待するのは無理だろう。トルストイと言っても万能ではないのである。

以上

2020年5月2日記す